

## やまたのおろち

イザナミと別れて逃げかえってきたイザナキは、黄泉の国の汚れをはらおうと、体を洗いました。そのとき、イザナキの杖や帯からつぎつぎと神さまが生まれました。しまいに、右の目を洗ったときに生まれたのは、アマテラスという女神さまでした。左の目を洗ったときには、ツクヨミという男神さま、最後に、鼻を洗ったときに生まれたのはスサノオという男神さまでした。

イザナキは、アマテラスに高天原を治めさせ、ツクヨミには夜を治めさせ、スサノオには海を治めさせることにしました。ところが、スサノオは、母親のイザナミに会いたいと泣きさげび、大あばれしたので、とうとう、イザナキは、

「どこへでも行ってしまいがいい」といって、スサノオを追いだしてしまいました。

さて、ここからは、スサノオの物語です。

追放されたスサノオは、出雲の国の肥の川のほとり、鳥髪という所にやって来ました。そのとき、肥の川の川上から箸が一本流れてきました。そこでスサノオは、

「この川の上流に、だれか人がいるのだな」と思って、たずねていくことにしました。川に沿って上っていくと、おじいさんとおばあさんが、若い娘をあいだに座らせて、泣いていました。スサノオが、

「おまえたちはだれなのだ」とたずねると、おじいさんは、

「わたしは、この国の神の子で、アシナヅチと申します。妻の名はテナヅチ、娘はクシナダヒメと申します」と答えました。スサノオは、

「おまえたちは、どうして泣いているのだ」とたずねました。すると、アシナヅチがいました。

「わたしたちには、娘が八人おりました。ところが、高志の国から、毎年、やまたのおろちがやって来ては、娘をひとりずつ食べてしまいました。最後にこのクシナダヒメが残りました。そして、今また、やまたのおろちがやって来る時期になったのです。この子も食べられてしまうと思うと悲しくて、それで、泣いているのです」

スサノオが、

「そのやまたのおろちというのは、どんなやつなのだ」とたずねると、アシナヅチは、

「目はほおずきの実のように赤くて、頭が八つと、しっぽが八本あります。からだは、苔むし、杉や檜が生えていて、長さは、八つの谷、八つの丘にわたるほど長いのです。腹はただれていつも血が出ております」と答えました。

スサノオは、

「そのやまたのおろちを退治しよう。そのかわり、娘さんをわたしに出来ないか」といいました。アシナヅチは、

「でも、わたしどもは、あなたのお名前すらぞんじません」といいました。

「わたしは、スサノオといって、アマテラスの弟だ。いま、天から降りてきたところなのだ」

それを聞くと、アシナヅチもテナヅチも、おどろいて、

「それは恐れ多いことでございます。喜んで娘をさしあげましょう」といいました。

スサノオは、クシナダヒメを櫛に変えて、自分の髪にさしました。それから、ふたりにいいました。

「おまえたちは、まず、八塩折の強い酒を造るのだ。それから、垣根をめぐらし、その垣根に門を八つ作るのだ。それぞれの門には、神棚を作り、そこに酒の桶を供えて、八塩折の酒をたっぷり入れて、待っているがいい」

アシナヅチとテナヅチは、いわれたとおり、八塩折の酒を造り、垣根をめぐらして八つの神棚を作り、酒を供えました。それから、やまたのおろちを待ちました。

やがて、ふたりのいった通り、やまたのおろちがやって来ました。

やまたのおろちは、すぐに、八つの頭をそれぞれの桶に突っこんで酒を飲みはじめました。すっかり飲んでしまうと、やまたのおろちは、酔って寝てしまいました。そこで、スサノオは、つるぎを抜いて、やまたのおろちをずたずたに切り刻んでしまいました。その血が流れて肥の川はまっかに染まりました。

スサノオが、しっぽを切ったとき、つるぎの刃にカチンと何かが当たって、刃が欠けてしまいました。ふしぎに思つて刃の先でしっぽをすつと切りひらいてみると、一本の太刀が出てきました。その太刀には、ふつうでないふしぎな力があるように感じたので、スサノオは、太刀をアマテラスにさしあげました。これを草薙の太刀といいます。

こうして、スサノオは、出雲の地に宮を造って落ち着くことになりました。アシナヅチ

は、その宮の長官になり、クシナダヒメは、スサノオの妻になりました。

スサノオの詠んだというこんな歌が残っています。

やくも 八雲立つ 出雲八重垣

つまじ 妻籠みに 八重垣作る

その八重垣を

八重の雲がわき起こる わき出る雲は八重の垣根を作る

妻とくらすために 八重の垣根を作る

ああ、すばらしいその八重の垣根よ

\* 八塩折の酒 何度も繰り返し醸した強い酒

原話…『古事記 祝詞』日本古典文学大系／岩波書店

再話…村上郁